

永 懷 ・ ラ ー ト ブ ル フ

この小文を謹んで都築貞枝先生のご霊前に捧げる

渡 辺 弘

1. 序
2. 相対性の問題
3. 宗教の問題
4. 社会主義の問題
5. む す び

1. 序

1949年、世界中の法学者、いや、そのみに限らない、およそ人間精神の最も奥深い問題と真剣に取り組もうと努力するほどのすべての人達の限りない哀惜のうちに、ラートブルフは、その肉体の生に告別し、永遠の国の人となったのである。彼はもはやわれわれの住む現代の人ではない。彼のあの温容にして、深く人を魅了せずにはおかない風貌に接する機会も、もはや永久に奪われてしまった。しかし同時に、彼はわれわれのうちになお今生き続けており、考え方によっては、以前にもまして、われわれに近い存在となったといえないこともないのである。

没後まもなく、わが国においても、ラートブルフ著作集全十巻、別冊一巻の訳業が完成し（東京大学出版会）今までにもまして、彼の業績的な作品の数々が、日本語を通して直接にわれわれに訴えてくる機会をえたのは、今日、彼を敬愛する多くの人々が、それぞれ、その心のなかに彼を迎えつつ、しばしその人格と業績を讃え、その思想により深く触れることのできることをよるこぶものである。私はみずからを顧りみて自分をラートブルフの思想について、その

ような意味では決して語りうる適任者であるとは思わない。それでもなおこの文を草する決心をした理由は、私のごとき、イギリスの議会政治を専攻し、法哲学については勿論、ドイツ語についてすら十分な素養のない者でも、ラートブルフの魅力に抗しえなかったことを身をもってしめすことが、この偉大なる思想家を讃えるにふさわしいと考えるに至ったからである。

実をいえば、私はフォイエエルバッハ (Anselm von Feuerbach) と同様に「法学はずっと若いころから私には内面的に会わなかった。今日でも学問としての法学には私は魅力を感じない。」と言わざるを得ないのである。もっとも、この生来私が必ずしも適性を具備するものでない政治学及び公法学を職業に選んだのは、遺憾ながらフォイエエルバッハのように幸福な配偶者に遭遇したからではなくて、別のむしろ凡そ形而下的な事情にもとづくものであるが、とにかく、今日までこの仕事を放棄する事なく人生を過し得た事は、いろんな事情と要因を含んだ複雑な因果関係によるものであろうが、その一つは確かに、田中耕太郎先生と、先生の講義を通じて知ったラートブルフのお陰であるといえよう。周知の事実ながら、ラートブルフ自身も、彼の学生時代には法学に興味をもつことができず、その体験にもとづいて後年（法学入門）Einführungを書いて、その悩みをもつ学生を指導している。私も田中耕太郎先生の法律概論とラートブルフの書に或る種の救いを見出したといっても、決して過言にはならないと思う。田中先生は必ずしもラートブルフの根本的立場を認められず、むしろその点では、かなり容赦のない批判的立場を採られたが、私は恩師のその批判にもかかわらず、彼の相対主義に強引な魅力を感じずにはいられなかった。ラートブルフが Binding の痛烈な批判にもかかわらず Franz von Liszt に結ばれたいきさつに例えるのは、私にとって余りにも傲慢であろうか。

これから述べる事は、以上の理由で、私が私なりにとらえたラートブルフ像に過ぎないわけであり、したがってこの拙文もラートブルフ自身の最も敬愛していた Goethe と同様、余りにも広くして、かつ深遠な彼の人格のごく、ただの一面を、しかも極めて不完全な素描に終らせてしまうかもしれない。フォンタアネに関する論文のなかで、ラートブルフが述べている次の言葉は、そのま

ま彼にあてはめる事が可能である。“Wie Goethe kann man auch ihn und wider alles zitieren.”（ゲーテと同じく、ひとは彼をまたすべてのことの賛成のためにも、反対のためにも引用することができる。）

ラートブルフについて私が述べる事が、読者の胸の中に、あるいは共感を、あるいは反感を、呼び起こすとするならば、それは“zahlreiche Widersprüche”（多数の矛盾）のなかで生きぬいた——なぜなら彼の言うように、“die Welt, die zu reich ist, um widerspruchlos zu sein”（この世は、余りにも豊かであるから、矛盾なしに存在しえない）であるから——この偉大なる哲学者を讀える表現形式——合唱の形式をとることになるからである。私のこの追憶は勿論その一大合唱のただ一つの part を受けもつにすぎないし、それ以上の事はとうてい、私の力量の及ぶところにあらず、ただ強いて心がけたい事は、あくまでそのパートは正確でありたいという希望だけは棄てる事がなかったことである。

カール・エンギッシュ教授の述べるように、ラートブルフを語る事は至難の業である。それは彼が単に、法学者であり、哲学者であり、政治家であり、そして芸術家であったということのみによるのではなく、それらの諸要素が彼の人格において混然一体をなしているからである。これらの要素を羅列してみてもラートブルフの人格像は浮き上っては来ない。これについてその一側面に触れる場合には、他の諸側面と常に絡みあってくことを覚悟しなければならない。そしてそれらの側面が、何と豊饒であるかは、彼の諸文献を読み込めば読み込むほど思い知らされることを覚悟しなければならない。1848年に彼の70才を記念して献げられた論文集“Beiträge zur Kultur und Rechtsphilosophie”（文化哲学及び哲学論文集）の献呈の辞は、まことにこの間の消息を伝えて余すところがない。

そこには、法思想家、法学教授、人文主義者、哲学者、市民、政治家、親切で純粋な人間ラートブルフにこの書を捧ぐという献呈の辞が刻まれている。

そしてこの人格を貫く最も性格的な特徴は、エンギッシュ教授の言葉を借りるならば「知的誠実さ」と「真正の寛容」であるといってよいと思う。彼の作

品は、そのいかに短いものを、或いはいかに小さいものをとってみても、いずれもそれ等は例外なく、全人格を傾けての語りかけである事を相手に伝えずにはおかない。それは透徹した厳しい論理に貫かれ、古今東西にわたる深くして広い学殖に裏づけられ、魂の奥深く静かにしかも優しく語りかけてくるのである。それは恐らく彼のうちなる科学の心よりも、もっと直接に現実と語り合っている彼の詩心が、厳しい理論的思考のまっただなかにおいても、その人格を温くつつんでいるからではなかろうか。それは悪戦苦闘の記録をそのまま、じかに我々にぶつけてくるベートーヴェンの音楽よりは、そのようなものをうちに秘めて、明るく微笑をふりかけてくるモーツアルトのそれに近いように思われる。なかでも、私の最も愛する曲の一つであるモーツアルトのピアノソナタ、A・dur 作品331（ケッヘル番号）を聴くとき、私はラートブルフの心に触れる心地がするのである。

しかも、このような玲瓏な人格が、実に彼の撓ゆまない修養の結果であるというに至っては、驚異の念を禁じ得ない。彼がその短気を克服するために座右にしていた「箴言集」が印刷されているが、次のリュディア夫人の言を誰が予期したであろうか。「Gustav ラートブルフは——父親の遺産のせい——生来非常に短期でしたが、そのことを知っていたのはごく近親の家族たちだけでした。」

このような人格を全体として印象づけようとするならば、次のような象徴的な方法をとるか、そうでなければラートブルフ自身が Feuerbach についてアプローチしたように詳細な評伝を書くかのいずれかをとるほかはないが、ここでは、私にとって最も重要であり、またもっとも問題を含んでいると考えられる2、3の点について、読者と共にラートブルフに接近を試みたいと思う。

2. 相対主義の問題

周知の如く、ラートブルフの法哲学のもっとも基本的な特色は、その（相対主義）にあると極言するも過言ではないと確信している。そして、その故にま

た、最も問題が多く、批判が多いのも此の点に集中している。私はラートブルフの作品から単に法哲学上の思索の素材を得るに止まらず、彼の相対主義にこそ心を強く引かれるのである。そこで、この問題を論ずることは非常に私には重荷であるのだが、これを素通りしてラートブルフを論じる事は不可能と思うので、私自身も甚だ不満足な研究ながら、少しくこの点に触れてみることを敢えて試みねばなるまい。

この相対主義がカント的な方法二元論に基づいていることは周知の事実である。Sollen（当為）はいかなる Sein（存在）からも導かれることはできない。かくて Sollensätze（当為命題）はただの Sollensätze によってでなければ begründen（根拠づけること）も beweisen（証明づけること）も出来ない。従って、最後の Sollensätze は理論的には証明不可能であり、公理として止まるほかはなく、認識はできずただ信ずるほかはない。このような考え方に立って法の問題を追求してゆくと、法的価値判断にあっては、その価値判断の窮極的前提は何かを理論的に明白にすることはできる。換言すればこれこれの法的価値判断をするには、その窮極的前提としてどのような価値を認めなければならないかは理論的に確立しうる。が、このような価値観自体が正当であることを理論的に基礎づけることはできないということになり、従って理論理性の次元では窮極的価値の多元性を認める結果になるわけである。それは逆にいえば一定の価値の絶対性は理論的には証明できないということになるから、そこからこの立場が相対主義と名付けられたわけである。しかしラートブルフが指摘しているように、これは理論理性の次元においてはそうなるより他にないというだけのことであって、実践理性の立場でも窮極的価値の選択を放棄してよいということの意味するものでは決してない。いや、ラートブルフは自らの相対主義を、あらゆる立場の正当性を一様に疑うピトラ的懷疑主義から区別して、人格の底からする決断に基づく、立場の選択を認めているのである。そして、それがもっとも深い人格的決断であるが故に、たとえ理論的にはその正しさが証明しえないとしても、自らの立場の正しさを疑いはしないのである。それゆえ、理論理性の立場から自分だけが正しいと主張しえないがゆえに、「自ら絶対な

りと僭称する見解に対して寛容であることはできない。」のである。このような相対主義の考え方はラートブルフには一貫していたものであり、晩年になって立場を放棄したり、揺らげたとか、或るいは、根本的に修正したとかいうことではないと思う。もっとも晩年における彼の自然法に対する態度をいかに評価するかという困難な問題は残っているが、ヴォルフ教授の言う如く、彼は伝統的な自然法論をそのままは認めたわけではないと思われる。この問題は、彼の *Natur der Sache*（事物の本性）の理論とともに歴史哲学の問題としてもう少し立入って研究する必要があるのを痛感するが、不本意乍ら不勉強の至すところ、まだここでは確信をもつ段階に及ばないことを詫びねばならない。ただラートブルフが相対主義の立場を変えたように解される点ありとすれば、それは相対主義という呼び名から人々が陥り易い誤解をとくために、その理論を一層明確に発展せしめたことがその原因であると思う。エンギッシュ教授もラートブルフは、その説を修正はしたが、最後まで相対主義を放棄しなかったと指摘している。

相対主義という呼び名は確かにある種の誤解を招きやすい危険な言葉ではあるが、それは既述のように、決して（最大の真面目さを有する）という修飾をつけても、ソフィストの立場という事は出来ないと思う。カール・ヤスパース教授の言葉を借りると、「我不関焉としてどんな立場も認めてしまうような怠惰な寛容のソフィスティック）ではなく、（よく聴き、与え、そして力を抑制する *Kommunikation*〔交通という意味ではあるが、ヤスパースはその実存哲学のなかで、思想と思想との相互理解による発展の意味に使っている〕の測り知れないプロセスのなかにはいっていく真正の寛容）である。一つの立場のみが絶対であるということを人間が歴史の次元で理論的に証明できるという主張は、ソフィストの寛容とは正反対の不寛容の危険を包蔵しているのである。ヤスパースはこの点について次のように言っている。（一個の真理があらゆる人間にとって普遍妥当的だという主張をすれば、——過去においてそういう主張のなかに生きた人々やまたその歴史の偉大さにかかわらず——そこには同時に *Unwahrhaftigkeit*〈不誠実〉が生れる。）その理由は、ヤスパースによれば、

そのような唯一の真理が、我々の認識しうる普遍妥当性を有するものとして、何らかのかたちで認められることになるが、万人はいやでもこの *Gewaltsame Wahrheit* 暴力的真理に膝を屈しなければならないことになるが、納得しないものは常に残るので、やがてあらゆる *Kommunikation* を不可能にするようなファナティズムスが現われるからである。ラートブルフの相対主義はこのようなファナティズムスの出現を抑制するヤスパース的な意味における *Kommunikation* を可能にするものである。彼の「法哲学」の註の補充で（新版102）ヤスパースの *Vernunft und Existenz*（理性と実存）を引用し（この意味では本書に述べるところは相対主義ではなくて *Existenzialismus*〔実存主義〕である）と認めていることは注意に価するものである。

ラートブルフの相対主義は前述の如く可成り難解である。そこでもう少し理解し易いかたちでこれをパラフレーズする事を試みたい。即ち合唱を考えてみるのである。」合唱は各パートが異なる音を受け持ち、それが同時に歌われることによってハーモニーが生れるのであるが、この際最も美しいハーモニーが生れる条件は、各パートが他のパートをよく聴く（ここでは特に聞くことと区別して、意識してきくことを表わすため聴の字を用いる）ということである。よく聴くことによって自分のパートの音は一層明瞭になる。従って一層確信をもって自己の音を主張することができる。他のパートにひきづられて自己主張を止めることは、合唱員としては自己の任務の放棄であり、また逆に自己の声をもって他を圧倒することは、最も悪しきハーモニーの破壊者である。この両極への危険を孕みつつ美しいハーモニーが維持されるためには、合唱員のすべてが、その瞬間瞬間に他を聴きつつ、自己の音声の *entscheiden*（決定の意であるが、*ent* は分離を意味する接頭語、*scheiden* は区分するの意）しなければならない。それはセネカが美わしくも述べた *Audiat et altera pars*.（他のパートもまた聴かるべきである）の意味するところである。昔、ギリシャのピタゴラス学派においては、人々は沈黙しがちで、熱心な聴手であり、聴くことの出来るものが賞讃されたと伝えられているが、これこそは合唱の精神であり、相対主義の精神である。ラートブルフこそは、この精神の最も深い理解者であり、その

生涯こそはその実践であったと言い得るであろう。相對主義の根本テーゼが *Audiendum, deinde audendum*. (聴くべし、しかるのち敢行すべし) であることは合唱を通じて理解し得るのではなからうか。それはまたフリッ・フォン・ヒッペル教授が指摘しているように、ラートブルフがプラトンの意味における (正義の人) *ein gerechter Mann* であったことを示すのである。

3. 宗教の問題

ラートブルフの相對主義を、いや、彼の全思想を理解するためには、彼の思想がすべて宗教、特にキリスト教の信仰の上に立っていることを注意する必要がある。彼はその相對主義を説明するに当って、レッシングのナタンの一節を引用しているが (自分の指環の宝石の力を發揮するよう、お前たち皆で競争するがよい)、実は彼がそこに引用していない更に数行先の一句がより重要な意味をもつものと思われるのである。(わしは、幾千年ものものに再びお前たちが、この裁判官席の前に立つようにすすめる。その時には、この席にわしよりも賢い男が坐っていて、判決を下すであろう。) これは明らかに最後の審判を意味するのではなからうか。その意味では相對主義のあの理論的断念は無責任な学問的怠惰を意味するものでは決してない。神の公平な審判を信ずるが故に、我々の不完全な判断をもってこれに置き換えることを慎しむのである。それは正にカントの言う理性の謙抑を意味しています。それはまたピリピ書三章十二節以下のパウロの言葉にも合致するのではなからうか。

(わたしがすでにそれ——キリストと等しくなりたいということ——を得たとか、すでに完全な者になっているというのではなく、ただ捕えようとして追い求めているのである……わたしは既に捕えたとは思っていない。ただこの一事を努めている。すなわち、後のものを忘れ、前のものに向ってからだを伸ばしつつ、目標を目ざして走り、キリスト・イエスにおいて、上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである。)

以上のことがラートブルフの考えから決して遠くないことは彼が「法哲学」

の中で引用している次の Rathenau の句が象徴しているように思われるのである。

（われわれは作曲家ではなくて演奏家である。だから各人は彼の楽器を出来る限り美しく演奏しさえすればよい……ハルモニィのことは何人も気にかける必要はない。それはもう一人のものが作り出す。）

ラートブルフの思想は、このように彼のキリスト教の信仰の上に立っているのであり、その意味で彼の宗教観、キリスト教観を理解することは、その思想の最も深い根底にまで触れるためには是非とも必要、不可欠であるが、詳細な検討は他日にその機会をゆずる事とし、この問題で私の心を特に惹きつけた点を1、2指摘するに止めることにする。

彼の信仰態度は、本質的には、極めて純粋な内面的なものであったと私は解している。トレルチ的分析で言うならば、その信仰態度は Anstaltkirche（制度的教会）のテュプスに属するよりは、むしろ本質的には Sektentypus に属していたのではなかろうか。このことは彼がゾームの（教会法は教会の本質と矛盾する）という語を極めて深い意味において理解していたことに現われていると思う。エリク・ヴォルフ教授に宛てた私信のなかで彼は次の如くのべている。（それ「ゾームの教会法の講義」は私の学生時代の最も強い印象でした。私はなお彼の教会法の綿密なノートを持っています。彼の教会法のテーゼは、真にあらゆる法の問題性を示していますが、いかなる法思想家もこれと対決しなければなりません。）

ヴォルフ教授が（彼は、福音的教会と教会法とは内面的に矛盾するというゾームの根本テーゼを、ゾームが法的にではなく霊的に存在する *ecclesia invisibilis* 「見えざる教会」が真のキリストの教会であると強調したことを終始確く支持していた。）という評はけだし妥当である。いや、彼は一步を進めて（法と、愛および信仰との間の矛盾を、徹底的に考え抜いてゆけば、単にルドルフ・ゾームとともに教会と教会法との対立のみならず、レオトルストイと共に、一般的に宗教と法との対立を承認せざるをえない。）ということを指摘している。このことは勿論、ラートブルフ自身が法や教会を否定した事という意味ではな

い。これは法が存在するのに自明であるというテーゼに安住することはパリサイズムだということを警告しているものである。Vorschule「法哲学入門」のなかで次の言葉を私は銘記しておきたいのである。

（いかなる法律家もこのようなラディカルな法の否定と内面的に対決しなければならぬ。法的な職業にとっては、法の尊厳と同時にその深い問題性 *Fragwürdigkeit* を常に意識していることが必要である。）

このような内面的な信仰の純粹性の上に立ちつつも、ラートブルフはなおその相対主義の精神である *Toleranz*（寛容）を失なわない。そのような態度はもはや信仰ではないという批判もなりたつかもしいないが、むしろ私にとっては、そのような態度ゆえに心ひかれる点が存在することを告白しなければならない。この信仰態度は *Gläubige Skepsis*「信仰的懷疑」ともいうべきものであり、それは彼のかなり晩年の作品である「フォンタアネ論」のなかに明瞭にあらわれている。この小論は *Skepsis und Glauben*（懷疑と信仰）という極めて象徴的な副題が付せられているが、そのなかで彼は次のように述べている。

（もちろん、彼の人柄からすれば、フォンタアネは信仰と懷疑との間の葛藤のなかに止まった。信仰は、余りにも、しばしば偏狭・独善・不寛容しか意味しないのに対し、懷疑は思いやりある親切を意味する、と彼は考えたのであろう……さらに彼は、常にあらためて懷疑を克服してゆく信仰こそ真の信仰だ、と考えているのであろう。）

これは、フォンタアネについての言葉であるが、それがまた彼自身の信仰態度であったことは、ヴォルフ教授宛の私信が物語る。

（私は自分の人柄からいえば、懷疑を愛し、そして将来もそこにとどまるでしょう。なぜなら、懷疑は思いやりや親切という性質をもっていますが、信仰は余りにしばしばファナティズムという性質しかもっていないからです。）

このような信仰に立っていたので、彼は、フォンタアネがそうであったように、カトリシズムに対しても極めて深い理解をもち、またある点についてはプロテスタンティズムよりもすぐれたものがある事を早くから認めていたので

ある。従って Der innere Weg (自叙伝) のなかでマリィ・バウム女史が恰かも晩年においてはじめて彼がカトリシズムに接近したような印象を与える個所をのべているのは、いささか正確を欠ぐものと思われる。私が不注意な読み方をしたため、マリィ・バウム女史をカトリックと思い、某氏がこの点をリュディア夫人に伺を立てたところ、彼女はその返信の中で、（あなたは彼女「マリィ・バウム」をカトリック教徒だとお考えになりましたね、どうしてお考えになったか、彼女にはわからないでしょう。彼女は、私や私の夫と同様、福音教会信者です。）と明言したということである。又、Der innere Weg のなかで、かれが郷里リュベックの学校に通っていた頃、一人の美しいカトリック教徒の少女エリザベートに愛慕を感じ、彼女を通じてカトリック信仰と礼拝の美しさを知りはじめたと述べているところを見れば、カトリシズムのある面に対する彼の共感を決して新しいものではなかったということがわかるのである。しかしこの部分的共感を決してラートブルフの回心を意味するものではないことを強く、そしてたしかに留意すべきものであると思う。

4. 社会主義の問題

ラートブルフが社会主義に関心をもったのは、極めて若い頃からであり、SPD に属して実際に政治活動に従事するとともに、その理論づけにおいても指導的な役割を果たしたことは周知の通りである。そして、彼がマルクシズムに対しても極めて深い理解をもっていたことは、その立場からしても当然であるが、彼が社会主義を支持するに至ったのは、決してその科学的教理によったものではなく、むしろ深い人間愛にもとづくことは、自ら Der innere Weg や Kulturlehre des Sozialismus の中で述べているところからも明白である。彼は「フォンタアネ論」のなかで（信仰と神学とは別ものである）と述べているが、社会主義についても、彼はその神学に従って、この道を歩いたのではなかった事が注意されてもよいであろう。資本主義の社会における人間の自己疎外を救うという最も人間的な熱情から出発したマルクシズムが、一個の神学とし

て教条化されるとき、それは非人間的たらざるをえなくなるというパラドクスをラートブルフはおそらく最もよく感じとっていたと思われる。彼はそのような基本的な考えのもとに社会主義を教条主義から解放して、これを人間生活に奉仕せしめることに努めていたといってもよいのではなかろうか。彼の社会主義はその意味では人格完成の一手段にすぎず、その自体が自的でないと言い得られると思われる。彼の著作の中で私が最も深い感銘をもって読んだものの一つである *Kulturlehre des Sozialismus* (社会主義の文化理論) の1949年版のあとがき——これは彼の死に先立つこと僅か四カ月前の日付になっている。——のなかで、(文化的創造の本源は何といってもやはり依然として人格であり、もちろんどんな憲法も今まで文書の上で確認したことのない一個の基本的人權、孤立への権利 *Recht auf Einsamkeit* である) と述べている。私は嘗て、フランス社会党の一員であったアンドレ・フィリップ教授の講演を聞く機会をもったのであるが、彼はフランス社会党には常に二つの傾向があった。一つはジョレスに源を発するヒューニズムで、他はマルクシズムであり、自分は前者に属し、ギ・モレは後者に属するということを述べた。私はこの話を興味深く感じると共に、別の機会に聞いたその *La crise de la pensée socialiste* 「社会主義思想の危機」という講演の趣旨が極めてラートブルフの社会主義の考え方に近いことに感銘をうけたのである。真正マルクシズムの立場からすればたしかにこのような社会主義は一個の墮落形態にすぎないかもしれない。しかし、私学的社会主義のみならず、科学一般が人間に奉仕することをやめて、非人間化する危険を蔵することを、われわれは、すべての社会主義が *Radbruch* の洞察から学ぶことを望まざるをえないのである。

5. む す び

ラートブルフを偲び、彼を讃えるためには、その思想について多くを探り、更に深くその人格にふれなければならないであろう。しかし、それは限られた時間のなかでは不可能である。この拙稿が、無限に豊かな彼の思想に接近する

ために、何らかの寄与あれかしと祈るや切なるものがある。Goethe と同様に、科学者としても詩人としても（生に深く結びついて、静澄な寛容をもって事物を自然な Sowohl-als 「あれもこれも」の状態におく）ことを好んだこの偉大な思想家に対して、一つの結論を下すことはふさわしくないように思われる。それゆえ、私もこの拙稿を閉じるに当たり、彼等の根本的態度を最もよく表わしているように思われる次の一句を引用するに止めたいと思う。

（われわれは矛盾を解くことの出来ないまま指摘した。われわれはそれを体系の欠陥とは認めない。哲学は決断を敢えてすべきではなく、かえって決断の前に立止るべきである。哲学は人生を容易にすべきではなく、却って問題的なものとするのである。哲学の体系は、材料が互につっぱり合いながらもちあがっているゴシック式のドームのようなものである。世界を理性の産んだ目的をもった被造物と考えないで、しかも一つの理性体系のなかで世界を矛盾なく説明しうる哲学があるとしたら、それは何と怪げなものであろう。そして、もし世界が窮極において矛盾であるのではなく、人生が決断であるのでなかったならば、生きるということは何と無益なことではないか。）

最後にラートブルフが最愛の二人の子息のために捧げた祈りの言葉を、そのまま彼のために捧げたいと思う。

Requcen aeternam dona ei domine et lux perpetua luceat.

（主よ、とこしえの平安をかれに与え、とわなる光をかれの上に照らしめ給え。）